

学長、副学長、教職員、学生など約300人が参加

日墨学長会議プライベート

友好の絆を確認し、新たな連携を目指す



10月7日、第5回日墨学長会議のプライベートがオンラインで行われ、日本・メキシコの両国から、学長、副学長、教職員、学生ら約300人が参加した。このイベントは、本学をホスト校として今年度実施される予定であった同会議で、新型コロナウイルスの影響により延期されたことを受け、来年度の同会議への参加の機会を高めるべく実施された。両国から3人のゲストスピーカーを迎え、活発な議論が

行われた。日墨学長会議は日本とメキシコの両国が、友好の絆を確認し、新たな連携や協働の発展を目的とするもの。2年に一度、両国の大学が交代でホストする形式で2011年より行われていて、第5回会議は来年度10月に本学四谷キャンパスを主会場として、「グローバルリスクと大学」というテーマのもと、さまざまなグローバルリスクに対する大学の社会的役割について話し合われる予定だ。プライベートは外国語学部イスパニア語学科の

谷洋之教授の司会で進行した。冒頭、暁道佳明学長が開会の挨拶を行い、「文化や社会土壌が異なる日本とメキシコの間で多様な議論が交わされ、課題意識を共有することで、両国間の大学コミュニケーションの一体感が醸成されることを願っている」と述べ、歓迎の意を表した。続いて、筑波大学生命環境系の渡邊和男教授が「産官学連携」、メキシコ大学院大学のシルビア・シオルグリア学長が「研究現場における女性研究者の活躍」、九州大学S H A R E オフィスの廣瀬武志教授が「世界大学ラ

新型コロナウイルス流行に伴う本学の対応について

新型コロナウイルスが依然として世界各地で流行しています。本学でも新型コロナウイルス対策本部を設置し、学生・教職員の健康と安全を守り、また、流行を抑制する社会的な責任を果たすため、さまざまな対策を講じています。大学からの情報は、本学公式ウェブサイトに掲載しています。大学の対応、諸日程や施設利用の変更など、常に最新の情報をご確認ください。また、学生の皆さんはLoyolaや電子メールを定期的に確認し、授業や学生生活に関する最新情報を得るように心掛けてください。

◆大学からの情報は、以下URLに掲載しています。
<https://www.sophia.ac.jp/jpn/news/PR/covid19.html>



司式者からのメッセージ

キャンドルの点火

聖歌

受け渡された。



のメッセージの後、コミットメント・セレモニーが行われた。李聖一神父と佐久間勤神父から、学生一人一人に「手」の祝福が授けられた。そして、メインキャンドルの灯りが、4人の4年次生によって、2年次生全員のキャンドルに

10月9日、総合人間科学部看護学科のナースングコミットメント・セレモニーが開催された。この日は2年次生が看護職を目指すにあたり、上智の精神と看護の技術を表す

「手」に、司祭から祝福を受けるもの。昨年同様、オンラインで行われたが、今回は聖イグナチオ職としての成長への期待が、非常に大きいものであり、自分の意思を貫き、

校歌斉唱の後、草柳浩子看護学科長が式辞を述べ、「社会から寄せられる人となるべく、これからの学習に心を込めて誠実に取り組んでいきたい」と語りかけた。聖書朗読、司式者からのメッセージの後、コミットメント・セレモニーが行われた。李聖一神父と佐久間勤神父から、学生一人一人に「手」の祝福が授けられた。そして、メインキャンドルの灯りが、4人の4年次生によって、2年次生全員のキャンドルに

ナースングコミットメント・セレモニー

看護学科2年次生が祝福を受ける

佐久間理事長の祝辞の後、2年次生代表の野田桜妃さんが「毎日、最前線に、自らの生活に多くの制限をかけるが、懸命に他者の命を救ってくださっている医療従事者の方々の後にしっかりと続くことができるように、精一杯努力してまいります」と謝辞を述べた。最後に聖歌が演奏され、式は終了した。

補助事業のうち、「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」について、令和3年度の新規取組機関を決定し、同志社大学が本学を共同実施機関として申請した取り組みが選定された。本事業は研究環境のダイバーシティを高め、優れた研究成果の創出につなげるため、女性研究者のライフイベントおよびワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備や女性研究者の研究力向上のための取り組み

文部科学省 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブに選定

9月30日、文部科学省は、科学技術人材育成費

力向上のための取り組み

み、女性研究者の積極採用や復帰・複職支援および上位職への登用などの直接的な取り組みを支援するほか、海外教育機関の先進取り組み事例を調査分析し、その結果を広く国内の教育研究機関に還元する活動を支援する「調査分析」などがある。選定されたプログラムは「調査分析」であり、名称は、「海外先進事例を通じた私立大学におけるダイバーシティ推進モデルのための調査研究」。このプログラムは、女性研究者の活躍促進に資する、海外の大学・研究機関などにおける優れた取り組み事例に関する調査・分析を行う取り組みであり、代表機関である同志社大学と連携し、2022年度末までの事業期間を通して、チュービンゲン大学(独)、スタンフォード大学、ハーバード大学(米)、マヒドン大学(タイ)の4機関の取り組みを調査し、日本の大学に適用した評価項目の検討と課題を検証するとともに、私立大学の強みを活かしたダイバーシティ推進モデルの構築を目指す。

鈴木誠道名誉教授逝去
10月16日、病氣のため死去。88歳。1933年生まれ。56年東京工業大学理工学部物理工学コース卒業、63年米国ノースカロライナ大学大学院数学専攻修士課程修了。

10月19日と21日に、国際機関や国際協力分野でのキャリアを考える人たちが対象にキャリアセッションが開催された。初日は、国連コソボ暫定統治機構セルビア・ベオグラード事務所長兼国連事務総長代表の山下真理氏(88歳)が、「国際平和と安全・国連キャリアの観点」と題して、基調講演を行った。続いて、植木安弘グローバル・スタディーズ研究科教授がモデレーターを務め、キャリア・セッションを実施。山下氏に加えて、国連訓練調査研究所持続可能な繁栄局長兼広島事務所長の隈元美穂氏、および国連食糧農業機関駐日連絡事務所長の日比給里子氏(87歳)が登壇。それぞれ自身のキャリアと国連で働くやりがいなどを語り

国連ウィークス (1面から続く)

21日は、浦元義照特任教授をモデレーターに迎え、キャリア・セッションを実施した。国連開発計画駐日代表の近藤哲生氏、世界銀行駐日特別代表の米山泰陽氏、およびアフリカ開発銀行アジア代表事務所副所長の木下直茂氏が登壇。国家公務員、民間企業、国際機関などさまざまな場所でも働いた経験話を話した。そして、まず何をやりたいかという熱意、次に専門分野を持つこと、最後に語学力、この3つが大事だと強調した。両日とも高校生や大学生を中心に多数の参加者があり、熱心な質疑応答が交わされた。■持続可能な社会に向けたエネルギーと太陽電池



山下真理氏

10月22日、理工学部共同のシンポジウムが開催された。冒頭、進行役の竹岡裕子物質生命理工学教授が、SDGsの7番目の項目である「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」を挙げ、シンポジウムの趣旨を説明した。続いて、陸川政弘理工学部長から「SDGsを研究対象として見てきた



宮坂力教授

が、国連ウィークスへの関わりを通じて「市民として行動する必要がある」と気付けられた。本日も皆さんと共に学び、今後の糧にしていきたい」と挨拶があった。はじめに、東京大学末来ビジョン研究センターの高村ゆかり教授が登壇。「2050年カーボンニュートラルに向かう世界エネルギーの脱炭素化と再エネへの期待」と題し、気候変動問題を具休例で紹介しながら、温室効果ガスを排出しないエネルギーの在り方や将来の社会をどう選択するかなどを分かり易く解説した。高村教授は、参加者の質問にも一つ一つ丁寧に回答した。次に、ペロブスカイト太陽電池の発明者として知られる桐蔭横浜大学理工学部の宮坂力教授が、「カーボンニュートラル社会に資するペロブスカイト太陽電池の開発」と題して講演した。日本のエネルギー事情や、太陽電池の種類、効率、コストなどを紹介。国内ではほぼ材料を調達でき安価で提供可能、かつ発電効率の高いペロブスカイト太陽電池について、動画や詳細なデータを用いて説明した。予定時間を超過しての活発な質疑応答の後、江馬一弘機能創理工学教授が閉会の挨拶を述べ、国連ウィークスの最後を締めくくった。